



# かけはし

〒611-0021  
京都府宇治市宇治里尻36-26  
TEL 0774-25-2500(代)  
FAX 0774-25-2353  
URL <http://www.takedahp.or.jp/>

## 放射線科特集

### 放射線科医とは



▲ CT(コンピュータ断層撮影)



▲ MRI(核磁気共鳴画像)

放射線科医の業務は大きく分けて3つの領域があり、CT(コンピュータ断層撮影)やMRI(核磁気共鳴画像)などの診断を主とした画像診断医、カテーテルなどを用いて治療するIVR(インターベンショナルラジオロジー)と、放射線を照射し腫瘍を治療する放射線治療医がいます。

私の専門はこの中の画像診断医であり、CTやMRIなどによって撮像された画像から、病態を正しく把握し、病気の診断や治療適応を考え、医師に伝える役目を果たします。

画像診断医ごとにそれぞれ特に詳しい臓器や領域が存在しますが、そうでない臓器全般に関しても、十分な診断を行うことが可能です。患者さんの全身を、画像を通して診療する総合医とも言えます。

### 目覚ましい技術進化

当院では1回転で64列の画像が取得可能な「64列CT」を導入しています。現在、CTの多列化はさらに進み、「320列CT」も開発されており、年々新しい機器の開発が進行しています。ちなみに、私が

医者になった10数年前の時点では、CTは1列のものしか存在しておらず、僅かの間に100倍を超えるデータが収集できるようになっていることから、いかに進歩が急速であるか、お分かりいただけると思います。

以前の検査で得られた画像データでは、詳細な病態の把握には限界がありましたが、撮影機器の著しい性能向上により、以前の画像では判別不能な所見も診断可能となるケースが増え、より慎重な読影を行う必要性が出てきました。一方で、1件の検査あたりの読影に必要な画像枚数がかなり増加していますので、読影にかかる労力も同時にかなり増加しているのが実情です。そのため、他の業務の合間に読影することが難しくなっており、画像診断を主業務とした画像診断医の必要性が、以前より増してきているように感じます。

また、MRIなどでは撮影方法が多岐にわたって存在し、かつ年々新しい撮像方法が開発されているなど、より必要な知識が専門化してきており、撮像方法を理解し、患者さんの病態にあわせて検査方法を最適化し、検査の質をコントロールすることが診断の可否に直結するためとても重要であり、これも放射線科医の大切な仕事のひとつです。

### 患者さんの全身を診断

画像診断医は、なるべく低侵襲かつ簡便な検査で、正確な診断を行い、治療に役立てるように、知識や技術を駆使するよう努めています。その診断範囲は、先に述べたように脳から心臓、肺、腹部、骨・関節、筋肉など全領域を可能な範囲で行います。そのため、全ての領域について、各科の医師と専門的に話ができる知識を持っていないといけません。患者さんを直接診ることは少ないですが、画像を診断することで、全領域の疾患に対して、病気の種類だけでなく、追加したほうが良い検査の提案や、病期の判定や治療法についてなど、踏み込んだレポートを作成し、診療に貢献できるよう努力しています。

No.69 平成25年11月30日発行

武田病院グループ経営理念

●思いやりの心

武田病院グループ基本方針

- ブリッジ・ザ・ギャップス
- 患者さんの権利の尊重
- 地球にやさしい環境づくり

宇治武田病院 基本方針

1. 安全で質の高い医療の提供のために日々研鑽し、技術と知識の習得に努めます。
2. 地域の医療機関、福祉、介護施設との連携を深め、地域医療の中核を担っていきます。
3. 患者さんとの良い信頼関係を築き、人間としての尊厳を重んじる医療を行います。
4. 患者さんを「私たちの家族」と考え、最良の結果が得られるように最善の努力を払います。
5. 環境にやさしい病院を目指します。
6. 働きやすい労働環境を創造するために、お互いを尊重する人間性豊かな医療人を目指します。
7. 仕事を通じて社会貢献できるよう努めます。



放射線科 医長

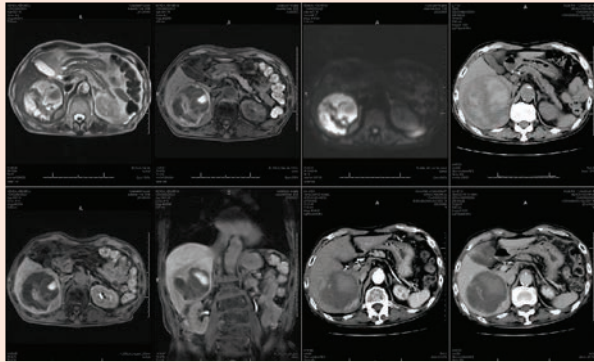
増南 輝俊 (ますなみ・てるとし)

平成13年 京都府立医科大学卒業  
平成13年 京都府立医科大学附属病院 研修医  
平成14年 京都第一赤十字病院 研修医  
平成15年 松下記念病院  
平成16年 京都府立医科大学附属病院  
平成20年 イメージ・コミュニケーション  
平成25年9月より現職

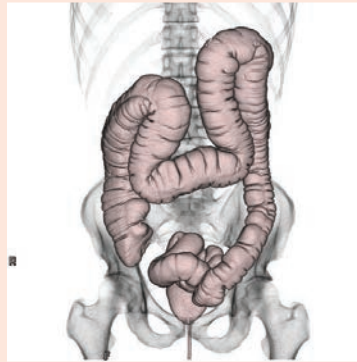
医学博士  
放射線診断専門医

## 特異な疾患も対応

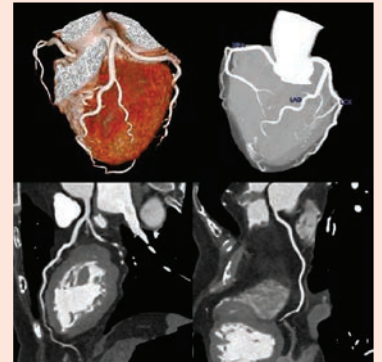
これまでの経験で、胆管細胞がん疑いで検査を行った肝腫瘍で、術前に読影精査した結果、実は血管肉腫であった腫瘍を診断した例などがあります。この腫瘍は多量出血を引き起こすので、術前の肝生検をしてはいけない点や、早期の外科手術に踏み切るよう担当医に直言したことで、良好な経過を得ています。



▲ CTで撮影された体の断面図



▲ 大腸から直腸を撮影した図



▲ 心臓の冠動脈を撮影した図

## 放射線学会参加や雑誌講読で知識のアップデート

最新機器や読影技術については日々刻々変化、進化しており、常に画像診断について知識をアップデートしないと、十分な診断はできないと思っています。新しい機器や薬剤の開発に伴う新たな撮像方法を理解することはもちろんながら、検査の進歩に伴い新たな疾患の知識も取得する必要があります。例えば、以前はカテーテル検査でしか評価できないこともあり、循環器医に任せていた心臓の冠動脈なども、現在ではCTでもかなりの評価が可能となったため、放射線科医も冠動脈についての知識が必要となってきたなど、絶えず新しい知識を取得する必要があります。そのためにも医療関係学会への出席や、雑誌を講読することなどを心がけています。

## 口述筆記端末で詳細データづくり

画像診断の結果は、レポートを作成し依頼医に届けます。その時心がけているのは、レポートの内容が過不足なく依頼医の疑問に答えられているか、また記載してある内容が理解しやすいかなどに注意し、作成しています。そのため、画像のどの部位を見てどう診断したか判るように、所見のある部分は画像を添付し、重要な部位などには貼布した画像に目印(図示)をつけるようにしています。また、短い言葉では伝わりにくい微妙なニュアンスを表現したり、鑑別疾患を挙げたり、今後の検査や治療の方針などにも言及しようとすると、文章は長くなることが多く、全てを手書きレポートで行うにはかなりの労力がかかります。そこで、その労力を避けるために、悪い言い方をすると端折ってレポートを作成しがちな医師もいるのですが、私は極めて高性能な口述筆記端末を導入することで、長文レポートでも効率的に労力をかけず作成可能となっており、レポートを迅速かつ丁寧に作成出来ています。

画像から判断可能な情報を、可能な範囲で過不足なく取り出し、わかりやすいレポートを作成することで、依頼医にも患者さんにも貢献することができればと考えています。

## 開業医の先生へ

現代医療の中で、画像診断と無関係の診療科はほとんどないといっても過言ではありません。そのために、内科、外科、整形外科をはじめ全臨床科と密接な連携をとりながら診断を行っています。ご紹介をいただいた患者さんには、安全に有用な検査を受けて頂き、確かな診断を行うことで、先生方の診療に貢献させていただきますので、宜しくお願いします。

(仮) 歯科・歯科口腔外科は、月～土(午前中)診療を行っております。記載のとおり各種合併症の歯科治療も積極的に行っております。ご予約に関しましては、地域医療連携室までお問い合わせください。

また、9/1より、放射線科医 増南輝俊(ますなみ・てるとし) 医長が着任致しました。読影医が不在の間、ご不便をおかけ致しましたが、より迅速に検査報告書をお返しが可能になりました。

尚、次号は増南医長のご紹介もあわせ放射線科特集を予定しております。



担当 田村 梅垣 高山 仮屋蘭